

舍利風語

全



金和風之序



梅通先生法蓮のあはれを慕ひて其の法説
の流るるを以て解し其の法を以て
其の法を以て其の法を以て其の法を以て
其の法を以て其の法を以て其の法を以て
其の法を以て其の法を以て其の法を以て
其の法を以て其の法を以て其の法を以て
其の法を以て其の法を以て其の法を以て
其の法を以て其の法を以て其の法を以て

して我々の故蒼然と云ふ事おのふに
 是乃く是の果又世の彼ある物と云ふは
 著る事と云ふは二は世の同も深んれは
 ちよしと世の二の貴物を一粒の粒と云
 々々々々々々々々々々々々々々々々々々々
 中法を及んてんてんてんてんてんてん
 冊を及んてんてんてんてんてんてん
 和れと云ふは世と云ふは

麦麩舎隨筆

○と云て此世ふある事 俳諧ありてはなす 麦四羅
 茶象ふ俳諧たりては俳諧の名目を去りては作者とては
 俳諧の詞とておれ一物も弁理せしとては儒門の聖なる
 あまふ金言名白とておれと是て世人のまきひとて世人の
 聞列しつふありては俳諧の舎得とては則俳諧也
 釈門の佛經のまきひ金紙金泥を用ひては是と世人の
 史列しつては説法とては俳諧あり神道道学とては
 既小國政を侍ふるふ茶葉古今は通しとては文字
 本義のふと云ふは通しとては今用ゆる日本の日本

漢字をよせて史安く漢易き中にして觸状も出さる事あり
志う程も此侘諧を神代より自然のまじりて久しく世小
法と承く世用を取らるゝものにて上

天子常此御河上程下卑賤乃為の河まで侘諧ありぬを
たしよ川ま時の流りある世の難苦小いも近う侍を
うらめていし有て今なきも今ありてむうなるも世を
俳諧なり程もふり

○代し乃歌心侘諧あり名目を知りあうといふ程を
侘諧といふも或志ぬ人れ多かりに芭蕉の翁侘諧は
本義と見ゆ一世小ある侘諧の句よまてこれ魂とよみ承く

世小孫さ程しを

梅の花紅紅色も似るるれあふ款もはけくそあは
右菅家乃御詠あるより一是侘諧歌なり又後き羽院乃
ぬれし小言 是侘諧の詞なり

○日本乃風雅を和歌也 唐土乃詩 天竺の伽陀小曰し
かありはたかむるれはしりて是れ志すさ家と夷狄小
近う承るし一さ程とは和歌ハ始あふれし御河より
出さる八重垣をよきし一月益よるを述る哉冷月小
はくし小承て題詠奇合ありけしより代しの撰集も
あつたりはれし吾國の美事とあるより多か茶葉集乃

うちめを貴賤のふらふたなく徳山樵のありつゝ世々徳と
そ世世徳の徳をそとく和徳は徳とありあともや中流
より舟よむ人のつらくしきましく品を撰むまつけてつとく
社言禁の事うたをよましく今世の徳をそとくまきまきして和徳の
徳とつとく徳をそとくみゆし事成定名て和のし徳をそと
引はくその徳をそとくしも用ひぬるにまんとりぬきれと和
徳の徳徳といはまきまきし和徳は徳とありあともや中流
より舟よむ人のつらくしきましく品を撰むまつけてつとく
國学系系選集のしとくしとくまねも風情をそとく
あつとく士農工商の四つ徳民のしとくまき必小日本

春れあつとく徳のしとくしとくまねも風情をそとく
あつとく士農工商の四つ徳民のしとくまき必小日本
山つとく和男馬のしとくしとくまねも風情をそとく
時乃徳より徳り来る徳曲暗弱の徳のしとくまき
て己の徳徳はさしとくしとくまねも風情をそとく
産業よりとくしとく徳とく和徳ハ 堂上よりとくしとくまねも
豪商富農耕職隠居のしとくまき必小日本
定ましく徳徳はさしとくしとくまねも風情をそとく
日本に備へし徳徳をのしとくまねも風情をそとく
一文不通徳徳はさしとくしとくまねも風情をそとく

○徳徳はさしとくしとくまねも風情をそとく

天子 將軍家 公家 諸侯までハさへ亦不和歌ありてハハ
似合しうハされと俳諧の御心得もあつたもの外
高の富貴神職隱居遊民のハ後あるまハ俳諧の心を
よと辱れたりと被とあつたり分限ある俳諧の連なるを
似合しきと被と國學歌學あつて遊人ハ脚僭上
中もあつてむる其余四民の風雅ハ俳諧の志を

○俳諧の志を周雅を昔とされたる文藝ハ狩野墨塗を用
ひて酒食の重菜馳走とぬきて質素をこつとす
為の遺書も「つり心得を布」

○若心門不七部集と要文とすれと被著山伏深川おと
さへハ其余まは日冬の日あつた所の人おと
しお終ふ平俗の大途ハ尋ん階梯と知る

○散事と出し古言を用ひ漢字とをひ人知ぬあつて
と被りて若心翁の深意お達したりお致致乃大志おさのら
あま世上の季字部類おありとも心風を信せん者ハ昔
あま今あま又かりにけりる季字所をとりて
くうにたある事を言出や洒落の域をうみとをよとを
そを辱ふやわら

○翁迂化乃後ハ去來ハ州ははるま素堂大志何と
たよた其角嵐雪我の意地をさく若風ふと利

多徳風伊勢風さうんあまをほほほ五毛子あまと点々風
不成きうらうら一旦蕉門とされし原哉安永乃頃より諸哲
競ひ起りて正風にみかんすし種と蕉翁の起りし時り
日く人の彩色を結構あてて八寄りも付ねるみよの日まの日
かくより導きたりしに正風を冠く天明寛政文化文
政を導てあま猿蓑炭俵とる所へ来るるあま安永小
みそ日をもくをくせつのみ乃月小あまを文化猿蓑と撰
まてくくく猿蓑ふくくく天保よ炭俵と詠らる
くくと炭俵小日くくくあまあまあまあまあまあま
あま安永あま文化天保よ天保の風調たり詩小唐宋

明乃風調あま日くくされと炭俵くくくくく天保
風俵あまあまくくく平日くくく四海あまやうくくくく人あ厚
く質素篤寧の風尔俾られと取らあまを炭俵猿蓑
集の意味にくく正風乃開きあまは蕉翁の極意小くく
くくあま

○天保乃俳諧よき連りくくく故事古歌のお木はくあまを
くくあまを穀伐を昔あまをくくくをきりくくあま乃徳を用ひま
枕幻のぬきりあまは漢傳の學たをくくくく和あま
撰集よ其代くくくはまあまあまあまあまあまあま
あまあまあま

○去婦ハ乃法則之去をく知を新のよ出を休物あるを
其席に宗匠不任しきさし合とくさるなりを他への
法を見候ふも字去ある候とむるなり

○俳諧ハ趣味あることいふより俳諧の趣句一句乃上もあれ
と連句に去句は血脈を傳へたりと去る前も亦裁一の
句乃執着をぬく

麻糸は長し短しむりや有毎乃きりといふはあれむ
是は程一毫の去嫌の字去あるも拙意は是なり不辨味乃
者かゆは眼小るも去嫌をこそとてむ乃去嫌と去るま
翁生涯大切は炭俵集のうらやむは是に

風細く相鳴る鳥啼くはは

と之類付句ある前に其類の下より啼かしてといふ句あり
次小堀のうらや秋風あるは一句小二夕所傳りハあれむ句の
意格別小かきうらやを其後小選集おもゆ候一ありこれ
千載の愚言と云く有れ是程ある也

○昔より季もとてといふ事成婦ふ者あるは法は以下いふ
くむかきもくもかきと古集とある也一數多あり定例
月系能去ん一やして素秋素去をせぬりなりこれ月
也乃云句月の初秋素且と付され初秋素且の付句あるは
法は亦有るなり古集も初秋素且句の出るはを

察も命だかり

○ 迹白きりふ事 他門ふく也 迹ふといふ事有んや 吾も

○ 人倫と白けりていふ事 かくいふ事ありていふ事あり

作さるるは 古集小一ト 此ル見えり 此と依て

小と依へか守吉人の妙事あり

○ 月小名花下 花嫁も 輕出 一より 吉婦人を

あつたふ事 皆他門ふく事ありて 蕉門乃 依て小門を

ふく 一 月を天象の白出 依て引上りて 付布 一 まる

ふく 一 月を天象の白出 依て引上りて 付布 一 まる

かくけて 桂と花を出さるるは 依て引上りて 付布 一 まる

歌仙式より七句 月月昔て あり 秋事 依ていふ事あり

州本 依ていふ事あり 八句 月月昔て あり 秋事 依ていふ事あり

出さるるは 依ていふ事あり 十句 月月昔て あり 秋事 依ていふ事あり

よ 依ていふ事あり 十一句 月月昔て あり 秋事 依ていふ事あり

古く 依ていふ事あり 十二句 月月昔て あり 秋事 依ていふ事あり

事 依ていふ事あり

如き事あり 依ていふ事あり

あり 依ていふ事あり

又

夕鳥や 蔓小地を 依ていふ事あり

七

西日茂ぬせく敷乃下菊

菊

又

十之春曉霞新若女之肌

若

小袖の細乃十之春紅若綿

綿

又

紫根こそよ有〜〜〜

紫

新〜〜〜

新

ほおのふある〜〜〜

〜〜〜

花ふの追屈志〜〜

若壽
蒼乳

ひは〜〜〜

は狼まの〜〜〜を孫〜〜〜たま〜〜〜又毫の〜〜〜
た〜〜〜難〜〜〜去〜〜〜守と難〜〜〜者あり是
理屈の編あ〜〜〜不難煉より出るもの〜〜川眼を
〜〜〜其系情を〜〜〜返屈志〜〜〜翁の体
孫〜〜〜と能た〜〜〜あ〜〜〜松乃〜〜〜と
あり〜〜〜今の〜〜〜の〜〜〜と古〜〜〜松根は傍
て腰を〜〜〜朗詠〜〜〜今〜〜〜風情が〜〜〜乃は
〜〜〜志〜〜〜松〜〜〜
よ〜〜〜蒼乳翁〜〜〜乃名〜〜〜

よくはなをきれるなるを

○花は風付重うくはといふ説あるは是又他はあらずなり程前
の儀借はあらずと見えし中計はけや久とて挙て後

猪猪や毎下に足跡も花乃果 泉川

雪のふもはをまらま風 路通

又

焚きくそ葉をより庭に氣 古芳

ちうきけりすま乃風 氣 翁

又自然むきひたるあり

三々の様も庭へ花はのま 尚古

ハツりりよま まは吹津 翁

又

幾口の花はの連小清なり 性慈

日とせり一葉一まは雨風 野明

但一貫序もま遠なるを

○安永の頃より蕉門中興一感あるあり時乃宗道達
中令一堂より言儀借の序余を借一自分侍殿の
宗道格小任一られお式をかきまされく法式を格お
執筆は作法は調ひをまより以来立札進言書且
亦ハ列序嚴重あり是儀借の感事をも儀士乃

面を起し垂れ時にして祖翁の存徳とるるのあんさきとるり
翁を世にまじく振の式化法ある事をやめを勵上りて乃
序會子出れとるる多かりとあり全く翁の存意よりある
垂るは是より徳借を賣ていひて己の威を去めし物とを
中やういふ徳生をむすけりやういふとあるたり況ふを以
ある者形容車輛へのてく吳体よりいへるをよむ吐辭能
を賣る時をあるいふき虚名をともめてはひふ堂より入
自分花の中宗通の号と免され芭蕉翁小花のち明辨
乃神号然中下して世上は流布をかきまきふの芭蕉翁人
一世の明眼を拜れ「燈籠のともるるさうりさうり」の海小弘通して會

野陀の境界をあきんべん末代乃吾民を向ふの一路よりいふ
多きは高徳成平後の隠さんといふる何をやた己う名利
かたりて祖翁のち吾成志は事あるをいふとて迷倒ある
しむあつむる事なること

○徳借をいふ術とていふは運のせきとすあれは人情小人情を
うらむ内体は内体成かきいふさうしと變化して成ぬとす
別古作をなす庵し人情乃ち誠小系糸とけけ景をもの越
小人情をけけけいもつ川も變化をあるやうあれは彼等柱
にもいふ世はもの少く死物なる庵し不振煉よて悪几功の者
かありは迹ををまほしし吳松ある事成は出ると越と切ん

船をわし軍成をよこ川まで越えまきくものくせきありけ
まじかり甚いき中し能ぬるまひまてかあし能僧寺僧山に
とれあり

○三鳥云本とけの秘傳口決とてせめて初ら成おらういん者
あり西風荏苒つもとまうて尋たれらうのとてふる

○名も実能宿とて中んも能名とてり撰むる能あれとす川ハ
何のたもつしかす点あるとてぬくよとて中とてかききを
能とて能し書はあはれとてし書はあし能とてあ
と実体ある成ぬるまやうにさるしつしむはうかく
者あり早意まきの垢とてよあぬまのま支限あり

○和名とて花夕花花里抄士口ありの能名とてあるものあり
生糸の層し揚子場淨極極の位あり俗くしなう
和名あれを能とて功者にありと舎子堂号とて能ありを
よれ事ありとて五文字七文字の事号園号ありとて

○能名の何れ何れありとて自ら書く者あり能とていれ能也
とてに潜号稱号とてあれと能祖を能とてあつた能れを
そ能ありと遠る能ありとて一還曆古稀の能を遠る能
能の下に能とてちるまきとて一能とて何れとて能
うれとてあつた能とてはけとて能とて名の高とて下もの人
しとて能と流り能れとてあつた能とて能あり

又龍鳳麟鸞ありきや成付ては作者と大なる格別の
はのれりや多かる成士貴もたてり邪路の通るる少なき
あやまりて付てしむるありてむる一文字もく俗に
まゝト者尺八能師ありにまゝあるとむる

○作例あるは各名もの蕉翁の能信ありま増あるは迷ひの
程かり唯ていふ殊唐の道行の目成言さす和漢の学
者成追ぬきて風雅ははるにありて

○一は不乱り殊唐の功をつむるも自ら藝と理とありて
ふたふものあり向上乃一路ありて祖翁の金言たるとは
○世俗のける雅をいふかたなるやたりはるもいふこと

やあるは雅とては跡もも苦物ありはるにさうして
雅とて唐物のたゞを雅物とありてはるは招きり是ハ
人我乃我とて真雅ありて雅とてやひるはありて
よめる字もて天地の徳をいふありは跡もも苦物と
やうの雅あり公家と公家のはめを侍と侍乃はめ所人而
姓も所人百姓のはめをあるは雅かり日本の者と日本の
物をよ招きり雅とて人をも唐物を雅とせん雅と俗と對
てりあり俗とてはるもせたりありてはるもはるも
いふありてはるも俗といふなりありてはるもはるもはる
らてはるもはるも雅かりてはるも又ありてはるもはるも

事々としてやのいゝも俗もいやうのいゝも俗もい
雅を取らひて撰業を山吹と申樂殿を和楽堂と
て故寧をたゞしむべきと雅言と云ふものを省略し俗
俣更俗を用ひ給ひて志も西の杜子美も超越せる言
吟を吐給ふた理

○氣韻風韻を自盡のそむく其くしゆの拙中よある相
あゝまかあゝはゝゝゝをいふをいふをいふをいふを
と候ま徳言たりとれと風も煉業をまゝといふをいふを
韻風韻もいふも其るなり其氣韻風韻を申さる感も
又ゝは申なるものも尋のいふは申あると申さるいふ

と此をいふたれと申れもきりとあるありあはれ不思候
書画茶道具あり氣韻のあるありまゝ好むといふかたを
む賢定まゝにいふは候なるなり町要たりとて

○さば様へのけりまゝにせはく遠くけたるいふまゝ候なり乃
と此も形もいふ中勝も乃方の家上よあまゝ筆抄の小
松成ありぬあけまゝと申すは好むて造らざるものなり幹
を依りて枝を結ぶあるは眼の神をかまふ如く何れも仁
まはるぬとあゝまゝとてさゝし曲字所をそゝしめて而も
くたうしてあゝまゝとてやうてあゝまゝの出まゝなりて巻らる
まゝにいつれ筆をいふと此をいふはよくやたく枝葉すま不

了何のなくいそむ曲言ルあり孫とははの流りて人の
 ともや付るこし里思ひ乃外小おほそをほくし見ふ
 付れそけ小幹枝のすねそ何となく風物そふらそそ
 たりそ余れ曲言ある松きやそ見飽しそふらそひあそん
 りたそあそぬ六ハつれしよいそ赤寺社かふ乃陸子似つそ
 たりそよら門は甘きあふりそ流りの同そを感し
 たるふらそそ

○あるはそそ付歌の余あり々体小左右よら門の花そそ
 おそそそ小流るそありそかそよそ蓮翹の題そそ
 たりそしあそそはひよまひきやうそ五字を改し

おきそ折白小志そそ出されそそといそ蓮翹そ和名の
 あれあたりいそにそやそ翹そまひきやう牡丹をほそん通
 何たり能詩の自由たそ成そ体そ

○原をそ体よたよ心得あそそそ好愛を減そ純そ門小入
 布そされそ初心より佳をよれ原そ定むそあそひそ
 高名家そ立寄るそなりそ其門小入そよそ肺のあそ
 所成うあそあそいそ減そそたは信度そ拙きあそ
 たりそりそ余れ名少そ陸子そ一旦のちあそ小ほそ
 たりそ原の并口小ほそ生涯そ中そ小閑らそてそ
 世果そ拙そそそ口勝き事そたりかそ是ハ我う

際と云ふは信子女よりひき一つあるは河一き事ナルは
 おぼえず他乃由のよるは際の新とあしとむとせえ
 いふもと云ふは信子際も信とあしとむとせえ
 乃と云ふ得あやかり者多し一たそ我際よりと云ふ
 系は門よりかひあて系門はいすすあはるひささきと
 又修りの一つかる所一かあしとむとせえ
 又と云ふも一つは門はかひあてはるひささきと
 あしひるもと云ふ系門はいすすあはるひささきと
 一と云ふ他門へはるは子も不義は系門はいすすあはるひ
 系と云ふ一は門はいすすあはるひささきと

○今何一は唐何一事と云ふは信子名家の二世三世とお
 續して権を継るものなり一は蕉翁の如意と云ふ
 是れは是は道のはつん子成りたるは信子をわたりはる
 一と云ふは名家の号は信子と遺子のあはるひささき
 は一と云ふは唐何一事と云ふは信子一は唐何一事と云ふは
 信子と云ふは唐何一事と云ふは信子一は唐何一事と云ふは
 乃名は信子と云ふは唐何一事と云ふは信子一は唐何一
 事と云ふは唐何一事と云ふは信子一は唐何一事と云ふは
 信子と云ふは唐何一事と云ふは信子一は唐何一事と云ふは

○

際とあれも用ひるまゝ倉庫に貯りておこし置く事なり余業あり
く俵潜小松の考より云釈をむさげりみたり思ふことほ
こきり又遠く上りたりも余業をかえり者も志ろり
とく名付け下坐に居たりあやうく下りたり人よむさわり
所にかり富家の者も只あつてほと志まると得たり乃といふ
まことといふ事不能成にくとて此より中より以下
乃考もたずりうひて休休と披露しと余考にたり小松ふ又
ゐて執公の者も余業をたけく彼の仲間におるなりされハ
俵潜小松ふと此市中中といひ稀なり歎かして死するも
あり俵祖蕉の翁無学又育を其後よりひき田中其人よ

我國の風物成りてあつたる後新あたふりといふ事
かゝるやと上り羽を離れあつたる人まゝ人のことといふ
たぐひ功拙を言ひたり人達人を何れ免衆をもちひまそ
風物弘通を言ひてまけむ

○ある書に曰 猿僧作の老田舎に於て一篇をよみたる小
そりも僧ハ何人よおつたやと問ふにうひ芭蕉翁の跡を
志る久松山系深をよみ風流風物の名をよみたり考
かゝる書ふさして俵潜小脚の者ある此鎮内より考
變歩俵潜小乃高をまひり法度たりと云ふとありされハ
稀りる物をかきあ人をたずり考りありと云ふされ是と

能浩者小派之人の以琴棋書画をとりめ諸道少あるあ
かり悦まふが技藝乃者より能浩を妬みおろむる法よく
編むるに是れ詭と云ふおろむるなり

○ 叔と社世より御あを老蒼の翁の如くをさるる風雅風流
をさるる月星の名境と云ふ故人乃事蹟をさるる人の
名のさるるた豪家社民をたつ子社里社社同小類
をば乃ら詮さるる衣作を儲けも奥多小飽き信酒を
けいさるる生涯をさるるやとて大なる陰謀策意の
者もかり其中に稀なる夜白連白小者おる者ありとわや
うら我情我執よりわて人のよまをんや欲し名をさるる

名人英哲小准せぬ人なり我れは強情小なる者なり終はハ
甘苦打も座り守名も永くをさるるて已りはくおろむる
ふと世を恨みあるハ急に鄰をさるる胸痛しと世を辭さ
はたさるるおろむるて又及をさるるやとて惜しむるや

○ 抄書翁の能浩昨と成るる因縁を金得を命たりとめ
と稗史分家乃君は仕へま君早世小よりつる人の殉死に似ひく
道世一佛門に入禪味を味ひ是を種しとてはる小能浩正
乃社門を命たりと志しれり自分と云ふを生涯を金得
院の隆り小はし一修業と云ふと一精を成りありとて徳書
に奉り世よりつるを能浩昨此趣意を継ぐありとて片一

風雅の原を弘く風俗の誠を成るべく向ふに雅俗を擇むと
あふふ多岐を以て子方業を以て術をみられた作に雅煉しく
終よまふ面目を有るあり先ま己の業を擇む雅俗作
成る有るよの因縁わくをわくかふまを志る有るたをま自家自
家子業害あまをま門ハ忠孝を以て一旦再真小志を以てけむ
有るなりあり一障り有て事あふはまは時因縁ときを以て通世
して雅俗少成ともわくはさる有る一それま雅俗共みたる者之大
うに教前人あれを以て法を以てまうに法をわくまかへて雅俗
作の子まを業を以て是因縁之替を雅俗の教と有り風雅の趣を
ま慮舎随筆畢

まふ有るま

追加

梅室随筆

○歌より雅俗をいやむるを唯俗徒平活と終むるに終むる
をたむけし風月のおもふるに雅俗也その業を以て雅俗あり俗徒
あり文字を以て雅俗あり是を以て雅俗といふ和ふまを以て
上雅を以て雅俗を以て雅俗を以て雅俗を以て雅俗を以て雅俗を
用ゆるありまを雅俗を以て雅俗を以て雅俗を以て雅俗を以て雅俗を

和を以て守るありあり雅俗を以て雅俗を以て雅俗を以て雅俗を
以て雅俗を以て雅俗を以て雅俗を以て雅俗を以て雅俗を以て雅俗を
涼州まを以て涼州の里ありまを以て涼州を以て涼州を以て涼州を

東にありてあのおちる風
 千とちるうらなふはなすてやめ花の葉

此歌の吟々全体雅を少くも、おちるに用ひたる葉の一字も
 亦一様を成撰ふより易くも、亦くは漢詩にくらぶ
 依傍作の如く、一歩法を用ゆるを易くも、短く
 言ふべきを難くも、難くも、是といふある竟の雅の
 勝なり

世にありたりと依傍の如く、別々のやうにおちる
 葉もあれども、はれうみふ他と

○系くまは活をいふ一巻も、一月り是れ月ひふれと清目と

一冊とるまはあこりひはるは活あり、予の在所ふ一人の書
 あつ、一、う表成理よくと、世者何の書も、志人用と
 一、しと類りよ、呼るも、志くも、類るも、世と通り
 説いて、おちるあのおちる、又、音あや、り、あ、と、く、は、志、人、を
 系くよ、あ、と、表、成、成、成、成、よ、と、呼、ん、お、内、よ、り、ち、ね、ね、と
 と、志、ま、り、お、呼、も、か、つ、り、る、世、と、り、違、人、は、活、を、お、ち、る、あ、の
 志、く、も、俗、な、る、な、の、こ、う、れ、は、な、や、く、る、一

○ある異服店の手代小十と、世といふ者あり、日ころ我門より
 頼ひて、依傍乃す、此を、お、ち、る、一、の、日、あ、つ、て、や、は、な、お、此
 頼、ま、く、よ、り、お、配、く、よ、り、付、ん、此、の、あ、つ、た、り、ゆ、て、ま、お、ち、る、と

信止はくは店の控までくまなく好きのさふりくししも来おもふ
その内ひりふ糸りんと申ぬり日店の控とあれは是れ飛小
及て寸さるあつと
（？） 此程きくし
（？） 此程きくし
（？） 此程きくし
弦ひくは
（？） 此程きくし
たしひくは天下随一乃大任を委りありあつと言歌乃小
勢せんとする人とふ一店の支配人小かりし能信と止
るなりて地盤隔の遠ひたり能信を基お基生花
乃難小あはれ人信世態よとる信とを和歌よるつひ
ふかりよる者成退きふ丁雅を志す信小信和風縁と

とてせむあはくしと立廻る命一古語よ曰車成ヤル小アラ
用由とあり高き車形小告つと物小きつねとみ然
軸にぬれキル編りたぐゆやふさるるたり風種を改すの
細小古車と形小とあぬと是成加ふ小車小油のあ

○連歌を一生百歌と定はれり能信も延宝天和の比中とき
一舎百員ありかといくを終日或は終ぬりし能信を舞
く勤仕家業けけりもたる能信あれも志しし自りル
ありありと貞享に能信能信の式を志らしし能信のなる
能信しれもを能信の十て一舎小教日かつる中しりよる
にあいし能信一舎よ一舎をなれし能信のありかのみより

とくやぬとある城を去る所一軒をゆくもやうり略て
 ぼねすき運くとも難鳴すてには尾一と候をねたりさる
 とんきとねやうに五のル七のル案さる際たりと案は時と
 うはききと席上の妨なりと候とに一うはく出と候一うの
 好むと候乃機踊よする所一軒一附のあゝさると候と
 他よきて附成儀る所一と候世直吹と吹と云席
 に出候時の候古ある成却て席上の儀借を席儀借と
 名付てぬル→水を徳言タコを付ち→と早く候る成取儀と
 さまあり思ふよ古代の人をねいより席の儀候ありてうと
 案するもに別々かの案良良石六平の敷つと候は違者

にああるも必定形りと候神のハ昔の候乃といふありて
 志まてかゝ成んとむるといふものもなくうらゝに風候と
 るかゝるの川とやたうに力敷を候て付もはるぬりわざと
 出候る中一候とていふも候案月を候も候味と志ると
 いふも生涯か一候む候一法儀と候も一旦艱苦を候これ
 と云儀と案る事ある候と候

附のよむふ時をいふより五のル七のル案さるを先より
 候るも母子程案す→何とて宣的なり只一本乃文と
 射あり候ふなりと五のル七のル案さるを先より候ふ候

梅室陸軍

附録

蒼龍翁遺事

○ 奥の素人藤井氏より取られたる書に「昔乃々庵より持来れり唐抄の多きを
 泥画として批傳の中に婦人三よりむ古代の雅拙と云ふ」と此画をかく
 狩もきつとむる價成る一いのみとて指落し一ふんと法便あり
 此畫は画のみを多そふかるべきを形き方すといふ人といふもふたよ遠
 二二中うたれといふもあんにいふ画のみをて見事たれと云ふといふ
 人はいちふとあきあきといふ此理批傳の公の命と云ふ

○ 何方能集中のや

行はさる乃片ありと云ふ

と云ふ付あり門人某たふ面ふと云ふふ申ふそれと
 何の面ふれとや汝の面ふきと云ふ曲言あり一淋の面ふき
 何と云ふは母は靜かた面ふと云ふ又踏うれと云ふ
 何と云ふ是もふ者た見識は力なるなり

○ 少未ぬくといふものあり是は廿ぬあり未ぬと云ふなり此
 理何のやあると

○ 其のまじ供書かおより五人かあて能傳を立ると

山より岸へ陰を搦りぬ

此眼十二の事一也一も成るなり又廿の斗也云々
 石を傳ふ又二十の事一也一も成るなり

返るはるる申す刻斗にならて者招氣をそと原はく大
はのを中某事りていし成守と新より新録中をえき入
かたし甘肉はあつて一素一二を挙て昨小備せんも別ち
多々中よりあつて成接也一奥のあへ持出と新より
敷りの振いも付るす一と某り見出すは二二あり是を
コウ一と志まふやと奥はくしとて言わらう一山原の振を
任付ぬらう山盛といふま此の新者なり是ふと付るんは
山より新録あつていと編者困りて去る

○あつて付る敷度素一とむきとくと奥はくしとて成守人
うらうて曰此ふといふもむらう一海のうらう新なり昨付る

見せ給くと奥曰これととも急も付るを汝ら素一はる程
素一たつて付る海一と海なるうか

○奥付る幾度も是を海は其付る中さうもなう口く
海はるに同じく只一者おて素一と自然と物小あつてと
新の者たつて是もさうも一物れも後後明のとれと
けつて中自在とあつて付る新と其はるを扱ふとも又の例
借小其通り新はふれを言なりとあつてあつて

○両吟子付るをえくはる大ふし一まあつて此あつてしう一かん
とあつて一素一と海一と

作者はふかれて曰と新よりうらうしと者おれとる昨はる小

かゝる事やうしけけおせざるありあはれけけ付まある
ふむ川うしそかきさるる甚むるなりと云へり
追て考るに成程左なりあるよりと云へりむ川うし
ありと云へり人とも心よるるを中一是より
れり也普通の作れ云はははなるなり

○軍東より新脚し来りてれ道は仕りたる者ある時風候の
はくそ日小國まである宗通の曰

なれおやとてはれてあけし冷しお
と云はれぬのうははれてめては字濁りてよむなりとてはれ
あけし冷しおといへり確確あると云へり使うふつさく

何なるたやうのふもあはれしと申されたる信子たる疑ふを
祖翁とて云ふ乃ふ亦於此とてははきりなりと云へり
なれお作あるなりとてはれし思ふ所 使うおつれより云へり
問ふに 極極信子なるがを云へり云下止の御使乃曰
先程のなれお乃ら御大い遠へりやと云へりよむる人
とてはれしとてはれしとてはれしとてはれしとてはれし
んたりし是を云へりて明しとてはれしとてはれしとてはれし
さむしとてはれしとてはれしとてはれしとてはれしとてはれし
を云へりしとてはれしとてはれしとてはれしとてはれし

○南無を千崖小瀼とてはれしとてはれしとてはれしとてはれし

一人集る既ニ急社ニ白目おたりと教白出せしむるに取
 中されき終に之文の體を尋きて去んとする時奥一白出さ
 且より連音ナレ侍れ侍て是能を論せしむる白は定めハ弁小
 出てより各々の終より一白付奥小似合さる然は法ふやきて
 明日系唐の世門是成論せんう成をうて系をまとねむる
 各事連音小付てん侍小不其白は張紙して余の白よかそ
 且より丸書扱の白よりす侍るる十倍せり侍の子御より事り
 て案一々むと日坊は官ハ日坊日と物案と侍るまらむと昨
 唯我者退出せしれと後さうに賦は付とてと案案あは
 るりハ一時斗中そと物案を呼ておのめと

誦り一白とて心跡畧るるに致さる寸

○半に及ぶ成案一は侍るるとは不書留をうる事あり
 數十白案一おれて門人に二白つとせむと評をさせむる評
 二白く小のひておはせ侍ある之衛一季に二白つたうと評と
 侍に侍る白物とて侍るも侍るも侍るも侍るも侍るも侍るも
 持白教百白小乃ふふあり

○奥ハ十家己度中おさく心ありく能侍のう後一わとま
 中身ぬやう小なれより其後の能侍を大なる物案あり侍掛き
 たるまで侍るあるあるあり一奥の能侍とある侍る侍る侍る
 系小揮の短冊の志とあり眼の筆をたて毛筆の上へおれ

ふりあま遷化あま年ちとる只くらとてしと致るれ萬八いよ
五葉ふとくふ小指多形と中折れ多ふ小指の言はふあふ
中を原名名吹あり

夕暮やたしふふあ花の川

叢山をつふふあぬけく秋の月

以てふ事て解ふ付多り作の雪

あふ善社新月とて寸梅花也

形と下り毛髪を舞うて空実り申真ふ能祖とる上

一

女君乳翁送事一終

弘化二乙巳歳二月吉祥日

京都山城屋佐兵衛

全 林 芳兵衛

大阪河内屋新助

全 河内屋茂兵衛

若山帶 屋伊兵衛

書林

